

# 博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 黒澤 直俊



学位申請者：古賀 健太郎

論文名：フランス語複合名詞の生産的な形成法について

Construction Morphology の枠組みを用いた形態統辞的考察

## <審査結果>

審査委員会は、主査に黒澤直俊（ポルトガル語学）、副査として浦田和幸（英語学）、藤縄康弘（ドイツ語学）、高田晴夫（フランス語学）、川口裕司（フランス語学）、の5名から構成され、それぞれ専門の見地から論文を精査し、内容を詳細に検討した上で2019年8月6日に公開の最終試験を行った。その後、論文および最終試験の内容について協議を行った結果、本論文は、本学大学院が学位授与のために定めた基準を十分に満たしているだけでなく、優れた高い学術性を示していることが確認され、よって審査委員会は全員一致で、古賀健太郎氏に博士（学術）の学位を授与することが適当であると判断した。

論文および審査の概要は以下の通りである。

## <論文概要>

本論文の目的は、現代フランス語の統辞規則において想定されていない「名詞 + 名詞」のような構造の複合名詞がどのような仕組みによって生産的に形成されているのかを実例の分析を通じて明らかにすることである。特に *pause-café*（コーヒープレイク）のように、第2要素(N2)が第1要素(N1 = 主要部)の補語として機能し、「N2のためのN1」という「目的」の意味関係が主に認められるような「名詞 + 名詞」構造が主たる対象とされる。本論文ではこれを「*pause-café*型複合名詞」と名付け、生産性と内部構造について考察し、それに加え、N1-N2間に *spécial* を介した[N1 + *spécial* + N2]という構造についても、*pause-café*型複合名詞との関連が示唆されることから考察対象とした。

本論文では具体的な問題点として以下の点が提起されている。まず、*pause-café*型複合名詞は他の「名詞 + 名詞」構造に比べても特に高い生産性が示唆されることが特徴であるが、形式的には統辞規則にそぐわない構造を呈しているにもかかわらず、生産的な形成が可能なのはなぜなのか。また、実際にはどのような構成素の組み合わせも可能という訳ではなく、何らかの制限が想定されるが、それはどのような制約なのか。さらに、*pause-café*型複合名詞や[N1 + *spécial* + N2]のような構造においては *fermeture estivale*（夏季休業）のような「名詞 + 関係形容詞」([N1 + AdjR])構造や *couteau à beurre*（バ

ターナイフ)のような[N1 + à + N2]構造との形態統辞的類似性が示唆されるが、それらと pause-café 型複合名詞との間の互換性はあるのか、仮に棲み分けがあるのであれば、それぞれの構造にはどのような意味的相違があるのだろうか。そして、pause-café型をはじめ、複合名詞とされる諸構造は連辞や接辞とはどのように異なっているのか。そもそも複合名詞というものは、語彙・形態論と統辞との関係性の中でどのように定義されるべきなのか。

本論文では語形成理論として Booij (2010)の提唱する Construction Morphology の考え方を採用する。この理論は、語形成が形態素の足し算ではなく語彙素を中心に行われていると考える「語彙素ベースの形態論(lexeme-based morphology)」の流れを組むもので、例えば[N1 + spécial + N2]のように、構成素の一部が未指定の語形成モデルそのものが、あたかも1つの語彙項目と同じようにレキシコンに記載されていると考える点が特徴である。語形成モデルの内部構造を統辞規則とは切り離れた形で規定できると考えることによって、本論文で扱われる pause-café 型複合名詞のように、統辞規則に必ずしも準拠しない構造が生産的に形成される仕組みについての説明も可能になるのである。

本論文は序論、結論と以下の6つの章から成っている。

第1章では複合名詞の定義について、自由連辞や凝結構造、さらには成句や接辞、かばん語といった、複合名詞を取り巻くさまざまな規模の言語学的単位との比較検討を通して論ずる。特に、対象の規模に関係なくさまざまなサイズの単位が語彙化したり、あるいは生産性を発揮したりすることがある点に着目しながら、派生と複合の違い、自由連辞と複合名詞の違い、さらには「語」の定義に関わる問題について考察する。一連の検討を通じて、語彙と統辞は直線上の両端に位置するものではなく、生産性という変数も絡めた2次元的な関係の中で位置づけられるべきだということが主張される。そのほか、複合名詞の通時的変化に関しても本章では言及されている。

第2章ではそれを受け、統辞部門に対する語彙部門をどのように位置づけるべきかを、生産性との関連で論じる。その中で、語彙により動的な性質を見出す語彙素ベースの形態論の有効性について検討したうえで、その流れを組む Booij (2010)の Construction Morphology (CM)の理論を取り上げる。そして英語やオランダ語において、それぞれの統辞規則から逸脱した構造の生産性がCMにおいてどのように説明されているのか、スキーマの概念と適用方法についての確認を通して考察する。そしてこの概念をフランス語の[multi + N/A]構造や[Tu es belle comme X]のような成句にも応用し、フランス語の語形成プロセスにおいてもCMの考え方が十分に適用可能であることを実証する。さらに、スキーマ化と成句度の関係性についても検討し、スキーマ化の高まりと成句度の低下が連動した「レ」の字型モデルを提案する。その上で、この「レ」の字型モデルの中に構文化、語彙化および脱語彙化の各現象が見せる動きを落とし込み、「語彙-統辞」・「生産性」

の二次元的連続体における動的な変化の流れを説明する。

第3章では、このような理論的枠組みを基に *pause-café* 型複合名詞がフランス語の [N1 + N2] 型構造の中でどのような位置づけにあるのか、特に属詞的な性質の N2 と関係的な N2 との対比に着目しながら検討する。その結果として、*pause-café* 型複合名詞は関係的な複合名詞であることを指摘する。さらにこの関係的な複合名詞と省略的な連辞との比較を通して、複合名詞は「名付け」と「説明」の機能を両方持ち合わせているのに対し、*parking cars 200m* (バス駐車場 200m) のような省略的な連辞は「説明」の機能のみを有しているという違いがあること、そして両者は明確に区別される必要があることを主張する。また *pause-café* 型の生産性については、構成素のどちらか片方が事前に指定された語形成モデルが想定されることについて指摘する。

第4章では構成素の片側が指定された語形成モデルの有効性と、その具体的な現れ方を検討するため、筆者が2010年8月から2017年9月にかけて収集した1,083種類の *pause-café* 型の実例データを、主に構成素組み合わせの可能性という観点から分析する。その結果として「N1名詞」の種類と生産性(タイプ頻度)の関係には大きな偏りが見られ、[*espace* + N2] や [*pause* + N2], [*assurance* + N2] など、特定の「N1名詞」を伴った場合にのみ高い生産性が実現していること、またその中でも特に *espace*, *rayon*, *coin*, *accès*, *pôle* などの、場所に関する「不完全指定の名詞」(*noms sous-spécifiés*) が多く関わっていたことを明らかにする。また、これら「不完全指定の名詞」には空間の単位を名付ける機能があり、それによって、単独ではカテゴリーの観点での結びつきが希薄な N2 同士を同一の下位概念ネットワークに組み込むことが可能になるということ、収集された実例のテキストを分析しながら論じる。さらに、N2 との意味関係については、収集された実例の分析の結果、大きく「目的」と「所属」の2つの意味関係があることを指摘する。

第5章では、N1の方に着目した第4章とは逆に *pause-café* 型複合名詞の N2 の性質と生産性について議論する。「N2名詞」の生産性については、実例調査の結果「N1名詞」に見られたほどの偏りは見られなかった一方、*enfant* や *étudiant* など、人の一集団を示す N2 が比較的さまざまな名詞を N1 として迎える傾向にあることが言える。N2 の性質については、AdjR との機能的類似性が示唆されるので、両者の対応関係を分析する。その結果、そもそも対応する AdjR が存在しないケースが全体の78%にも及んだほか、たとえ形式上は競合が予期されても、実際には AdjR が属性叙述的であったり、関係的な読みが実現する組み合わせが限られていたりなど、実際には競合せずに N2 と AdjR の棲み分けが成されていることも多いことが明らかになった。そして競合が認められる *atelier cuisine* と *atelier culinaire* のような対立においては、[*atelier* + N2] のような N1 固定の語形成モデルによる生産的な形成が、結果的に2つの形式の競合を招いたという可能性が

示された。そして、このような複数の異なる語形成モデルによって関係的な複合名詞が形成されていることを、スキーマとサブスキーマの関係として説明した。

最後の第6章では、*pause-café*型の一変種のように見える[N1 + *spécial* + N2]について注目し、特に *spécial* が果たしている文法的機能を、収集した 299 件の事例の分析を交えながら検討する。その結果、この *spécial* が他の品質形容詞とは異なる振る舞いを見せる点、当該位置の *spécial* を他の形容詞に置き換えることが困難な点、N1 への性数一致が必ずしも行われていない点などから、*spécial* が[N1 + à + N2]における à のような、複合名詞のコネクターとして機能している可能性があるという点を指摘する。また[N1 + *spécial* + N2]の生産性に関しては、[N1 + à + N2]と同じように N1、N2 両方のスロットが未指定であることから、実際には意味的な制約をある程度受けるものの、基本的にはあらゆる組み合わせ可能性が見込まれることを明らかにし、またそうした傾向からも、[N1 + *spécial* + N2]を（もともとコネクターを介さない）*pause-café*型複合名詞とは異なるタイプとして、むしろ[N1 + à + N2]に類似した構造として捉える方が妥当であるという見解を主張した。そして、この *spécial* が形式的にはコネクターとして機能する一方で、「特別な」というもともとの語彙的意味を保持している点にも言及し、この文法機能と保持された語彙的意味の間のずれを説明するうえでも、CM で提案されているスキーマの概念が有効であることを示す。そして最後に総括として、現代フランス語の関係的な複合名詞を実現させるスキーマとして、コネクターを介さない3つのサブスキーマと、コネクターを介する別の3つのサブスキーマが存在していることを提示する。

一連の考察を通じて、現代フランス語の統辞規則に準拠しない *pause-café* や[N1 + *spécial* + N2]のような構造が、いずれも「語彙－統辞」と「生産性」からなる2次元の連続体の中で、語形成モデルという一種の語彙情報を基にして形成されていることを明らかにした。そして統辞規則にとらわれない独自の規則的・生産的形成の枠組みを持つこれらの構造が、語彙と統辞の間で見られる動的な変化の流れの中に位置付けられ、語彙と統辞それぞれに対して影響を与え合う関係にあることが示された。

### < 審査概要および評価 >

審査委員会は、特に次の点を高く評価した。

1. 研究対象である[N1 + N2]型、および[N1 + *spécial* + N2]型の複合名詞を研究するにあたり、独自のコーパスを作成し実証的かつ理論的に詳細に研究したこと。古賀氏が作成したコーパスは、いわゆる規範的な言語使用から逸脱しているパロウ的なものが主体となっていて、それ自体、言語史的に興味深い資料である。
2. 分析にあたり、先行研究を詳細に検討し、自由連辞や凝結構造、成句や接辞、かばん語といった複合名詞を取り巻くさまざまな規模の言語的単位との比較検討を

行い、生産性や凝結度といった観点からそれらを包括的に論じ、語彙と統辞の関係性について 1 次元的に直線上の両端としてとらえるのではなく、生産性という変数も絡め 2 次元的な関係の中で全体像を描いたこと。さらに、Construction Morphology の理論枠組みを用い、「語彙－統辞」間の語形成モデルの供給の仕組みをスキーマ化の高まりと成句度の低下が連動した「レ」の字型モデルにして構文化、語彙化および脱語彙化の現象を明晰に落とし込んで示したこと。

3. 主たる研究対象である pause-café 型複合名詞の構造関係の考察では、特定の「N1 名詞」という観点から意味関係を分析するだけではなく、逆に特定の「N2 名詞」から見た「N1 名詞」との結合可能性に着目することで「N2 名詞」と競合し得る関係形容詞などとの顕在的潜在的関係を考えることで複合名詞形成のサブスキーマを立てていること。
4. [N1 + spécial + N2]型複合名詞を分析し、pause-café 型複合名詞とは異なるタイプの、むしろ[N1 + à + N2]に類似した構造として捉える見解を主張し、この spécial は形式的にコネクターとして機能する一方、「特別な」というもともとの語彙的意味も保持している点を指摘したこと。

論文自体の文章は十分に推敲されていて読みやすく、誤植等の単純ミスも少なく極めて完成度の高い論文であった。公開審査の場では、古賀氏は委員の様々な質問や批判に明確に答え、論文の限界や問題点についても十分に自覚し、今後の研究の発展が期待される。

以上のことから、審査委員会は最終的に審議をした結果、本論文は博士（学術）の学位を与えるにふさわしい学術的成果であると判断し、古賀健太郎氏の今後のさらなる研鑽に期待するという認識で一致した。